故景山梅子刀自
紀念

世界婦人

第三十三號

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

世界婦人第卅三號目次

○景山楳子刀自肖像及ひ筆蹟……口繪
○祭文……山口直治
○わが亡母の俤……福田英子
○俳句、和歌、俗謠……故景山楳子
○年譜……記者
○涙下り書く能はす……澤田正泰
○今は心細く候……仝澤子
○骨肉の情……澤田正文
○備前の閑谷黌……安部磯雄
○心許りの御拜……澤田正泰
○母の務……小野吉勝
○祖母上の感化……本城嘉吉
○親の死……木下尙江
○最後の拜顏……澤田豐丈
○福田のお婆樣……石川三四郞
○斷腸の想ひ……五十嵐憲邦
○神保町時代……景山要
○編輯局より……記者

◎定價 ▲一部六錢●十部五十五錢●二十部壹圓▲申込は總て前金の事
（本號に限り定價金拾錢）

發行兼編輯人 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 石川三四郞
印刷人 東京市牛込區赤城下町五六番地 井口正之
發行所 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 世界婦人社
印刷所 東京市神田區豊島町卅四番地 博眞堂

故景山梅子刀自肖像（末子浦田淳造氏撮影）及び其筆蹟

祭文

（一月廿日染井に於ける神葬式場にて唱ひしもの）

景山楳子刀自乃命乃柩乃御前爾齋主權大敎正山口直治謹美弖誅詞白佐久阿波禮汝命波也浦田重兵衛大人乃眞奈御娘刀坐之弖文政乃三年刀云布爾生禮給比成長留隨契阿里弖岡山縣士族景山確大人爾嫁伎給比弖呉竹乃操乃節正之加里之波申寸母更奈里妹背乃御中良比鴛鴦乃契里母啻奈良邪里之加婆比古御子二人刀比女御子二人刀乎生美給比弖克久御心乎其子女等乃成育爾深米給比御家乃政波搔鳴良寸玉乃緒琴爾吹伎通布松風乃調邊乎佐閉留添閉多留事乃如久露滋加里母亂留々筋奈久能久治米齊閉給比弖年頃乃御心盡之乃大方奈良邪里之波申寸母古曾畏介禮瑞枝刺寸楫乃若葉宇良和加伎時與里其才識世乃常奈良寸群樹津姫松原乃中爾一本高久世爾擢介出傳多里介禮婆今片見刀遺留御子君等乃中爾波自其御質乎稟介繼加世坐之介牟夙爾高行久鶴乃高々爾其名世爾聞古衣之佐加比女君乃坐之介留賀如伎實爾刀自乃爲爾高譽刀母仰伎稱閉奉留可久又幽冥乃道乃花乃翳刀爲之給布與寸賀刀母成里叙可久特爾汝命波之母玉乃緒乃長伎歳月水鳥爾敎乃庭爾降里立知給比弖功績有里之中爾加禰弖岡山乃

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

縣爾之弖波女子教訓所乃教授刀奈里或波女紅場乃校長刀奈里或波淑紅學舍乃教職[illegible]爲里給比弖教乃鞭乃束間母休布事奈久學窓乃明介暮禮留竭之々力尠加良邪之加杼漸々爾老乃御世乃母成里坐之介禮婆隅陀河汀乃蘆乃宇良安久老乃春秋乎送里給比弖今波何一津浮雲乃御心爾懸留物思比乃隈母無久御子孫乃君等乃彌次々爾立知榮行久世乃態乎上無伎老乃慰藉刀見愛傳樂之給比多里之加婆諸人等乃御心爾波爭傳尚加久奈良頁色變良奴常磐乃松竹

百年母千歳母賀刀松爾契里竹爾與曾閉弖深久遠久御榮乎乞祈美奉里思賴美奉里多里介留乎限有留現身乃人乃世波寸部母寸部奈久常磐奈寸其松竹爾波背給比傳此月乃十八日刀云布留八十有四刀算布留高伎御齡乎御壽乃限里刀池乃面乃春乃薄氷風爾亂留々事乃如久垣本乃春乃淡雪日影爾消由留事乃如久遂爾果敢奈久神去里給比之波悲之刀母悲之伎事乃極美奈里介里然波言問杼隅田河八十瀬乎越由留老乃涙並奈良奴御齡乎重爾給比弖何乃思欲之惱麻寸節母奈久御意閑加爾老足良波倍留吾世乃一世乎遂爾見果弖給比多里之事乃蹟乎顧美思閉婆今波何乎加刀自乃御爲爾憾美奉里何乎加嘆伎奉留可伎御意安久穩比爾幽冥乃神乃御許爾復命奏之御遺骸波今藏米奉良牟隨木陰靜介伎此染井乃乃奧津城所乎千代乃住所刀岩隱里鎮座世刀畏美拜美母白寸

明治四拾貳年壹月貳拾日

307

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

わが亡母の俤

福田英子

あゝ母上は逝き給ひぬ。百たび千たび呼び慕ひまゐらすとも、御魂はつゐに反らむやうなし、あゝ母上は逝き給ひぬ。

如何で世の常のさまならむには、いまそかりし日の奉養、ありしに優りて、御心を慰め參らせむ術もありしなるべきに、もと〳〵緯を恤ふべき身をば、然し男のすなる業によせて、思はぬ禍にさへ罹りし時など如何ばかりか御心の惱みを添へ參らせけむ。忽ちに永き御別れとなりて、悔また新たに風樹の感ひいと切めて、身を刻むばかりぞかし。

こゝにわが亡き母の性行の一つ二つを書きつらぬるは、强ちに人に示さむとにはあらずたゞわが私の君蕎の薦に換へむとてなむ。

母上、名は楳子、浦田氏。祖父上重兵衛の第三女なり。祖父上は舊岡山藩の士、剛直をもて藩主の旨に忤ひ、遂に民間に流浪しつゝ、文人画に衣食す。號は半山と申しき。傍ら家塾を建てゝ子弟に敎へしかば、母上また其間に机をおきて、和漢の學を修めぬ幼にして敏慧、且つ學を好み、やがて能く唐詩長篇を誦して、衆を驚かせしとぞ。

長じて岡山藩士景山確に嫁す、即ち父上なり。當時父上は藩の御祐筆を勤め、又た私塾を開きて居り、母上は實に嫁御寮の身を以て、直ちに有力なる塾の敎師とはなれるなりけり。

明治五年、岡山に女子敎訓所設立の事ある也、選ばれて首要なる敎授となり、わが塾生を率ゐて此に入る。まことに日本に於ける女學校の嚆矢なり。後ち所長靑木某と意合はず、去て再び私塾を開く。敎訓所の生徒また多くは母上に從ひて去る。

次て明治十四五年の頃、蘇娼妓を敎育せんとて、女工場なるもの設けられ、母上これが場長に推されしが、十六年には、母上自から蒸紅學舍といへる女子夜學校を創めぬ。そは女子卑屈の弊風を矯正せん

との目的に出でしものにて、おのれ亦た母上と共にいさゝか力を此に致しき。

然るに其頃、自由民權の論大に起りて、母上また之れを唱へ、おのれの如き、遂に其運動にさへ加りしかば、忽ち政府の忌む所となりて、蒸紅學舍の閉鎖を命せられ、餘儀なく、名を景山學舍と改めて、尙ほ常に二三百の生徒を養ひたりき。但しおのれは閉鎖の命の下ると共に、東京に出で、間もなく大阪國事犯事件に加はりて、あはれ獄に投せられしかば、其後の景山學舍は、主に母上によりて經營せられしなりけり。

廿二年、憲法發布の際の大赦令によりて、おのれ亦た幸ひに放免せられ、東京神田錦町に實業女學校を設けしかば、景山家は擧て東京に移住し、共に力を協せて敎鞭をてゝに執りぬ。

しかも一家團欒の樂は、久しからずして昨日の夢となり、明治廿四年、父上先づ逝き、次で父上の妹なる叔母浦田藤子逝き、更に翌年兄弘逝きぬ災禍連りに到りて、同校もまた閉鎖の悲運に遭へるなり。

廿六年、おのれ福田氏に嫁するに當りて、母上は孫要と共に岡山に歸り、一時女婿澤田氏に寄りしが、廿九年再び上京して、浦田家若くはおのれの寓居に起臥しつゝ、奉養甚だ薄かりし間にも、猶ほ心靜かに晩年の風月を樂み、よく八十四の高壽に躋りて眠るが如く逝き給ふ。あゝ悲し、母上は遂に世に在さずなりぬ。たゞ若干首の俳句のみぞ、母上の人となり、扨は趣好の程を偲び參らすべき紀念とはなりける。

エホバ家を建てたまふにあらずば、建つるものゝ勤勞はむなしく、エホバ城をまもりたまふにあらずば、衛士のさめをるは徒勞なり、なんぢら早くおき遲くいねて辛苦の糧をくらふはむなしきなり、斯てエホバその愛しみたまふものに眠をあたへたまふ

（詩篇第百二十七）

俳句、和歌、俗謡

梅子刀自の作物甚だ多かりしが、生涯轉々して長く定住せし事少かり爲め、多くは逸失して今ま捜索し得たるもの僅かに手帳一册あるのみ、左に其全部を掲ぐ、閲し見るに、是れ刀自が老年に於りて其幻ろけなる記臆を辿りて手記せしものなるが如く、從て字句の甚だあやしけある、平常言ひ傳へたる所と異れる點も尠からず、又、此外に秀であるもの尠からざりし如く聞けども、今は見出し離きぞ詮無き。（編者記）

俳句

○
遠音にも聞や琵琶湖をつるの引

○
鐘の音を包むうなりやはな曇り

○
浮れ出てうかれ馴染や花の人

○
葉さくらとなれは怠るそうじ哉

○
只だ居てもけふの暑を田草とり

○
朝寝せぬつもり違ふや夏の月

○
岩はなやこゝにも一人月のとも

○
何處迄も友あり月に遠歩行

○
訪ふ人に向はるゝ秋の戸はそ哉

○
白露もせまき宿りや糸すゝき

獄中の人へ年末に送る文の中へ

○
繋かるゝ身もへたてなし年の暮

除夜の句

○
への字なり腰はくのじや年の坂

○
七ころひ又もころんでとしの暮

麹町壹番町に住居の日

○
あつき日や人もむされて麹まち

羅文飛句

○
ふとにげた鶯低う竹にとふ

同

松の木の雪やはや消ゆ軒のつま

同

永きかな春日のひるは永きかな

同

永き日に小猫と小猫二疋かな

同

ながうよふ花の其名は芙蓉かな

十二月三十一日の夜大砲の音を聞て

○
牛は送り牛は迎へて夜のどん

神武天皇祭上野の花を見て

○
人も花も笑顔あふれて神武祭

○
留主居して思ひやらるゝ花の人

四月中旬青葉がたきもなくて

○
小説にうむで茶に酔ふ日長かな

故郷の舊宅を賣却し余金にて染井の墓地へ石碑建立様は未た存命あれど朱入にて死者の仲間入せしを見て安心

○
露の身も風吹かぬ間の命かな

和歌

一　○

夫確永眠の時紅葉の時節なれば

おもひ遣るしての山路の紅葉ばを
わけつゝ君はひとり行らん

309
Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○

その年義妹死去し又よくとし倖弘歸らぬ旅におもむきたれは

何に見ても過にし人を思ひいで丶
　慰むよりもかなしかりける

○

過し年彌生のころ名所の花見んと私學の生徒たれかれなうな
かしまづ上野よりはじめ

此上野なかめはけふか飛鳥山
　待し櫻もさくやすみ田川

○

春風のふくは内なる鉢の梅
　おにはそとにて鶯のなく

蒸紅學舍開莚祝三連歌

古さと岡山にて女子の夜學をまうけ蒸紅
學舍と名つけ入學生徒滿なりし時

今しばしむろに育て丶鉢のうめ　「梅千女」
　霞ひかる庭のあけぼの　「竹裳」

吹き待て深さかはりや雪の楳　松露
みしか夜の夢おとろかせ時鳥　楳千女
杉垣の中に菴やわかつばき　苔石
聞そめてまたきく迄やほと丶ぎす　梅千女
薮こしに見えすく川や冷し馬　苔石
か丶やさの月かけ床し雪のうへ　竹裳

○

俗謠

明治二十二年の彌生の頃楳病てうちふしける時いまやうに歌
ひて拙なけれと

春のなかばに　やみふして　花のゆくへも　しら雲
の　きゆるに近き　老の身を　うからやからの　あ
つまりて　ひやにみとりし　かひありて　病はいつ
か怠りぬ　げに子だからの　たうときは　醫藥の効
にも　まさるらむ

○

青柳　ぶし

奥ふかくてもる鐘音響くら舞　「苔石」
　歩行は醉ひの話とうきけり　「英女」
つひにないやうにほめ合ふ月の晴　「鶴影」
　遅れし雁の竿にとりつく　「翠　」
うそ寒に裾のみしかき蝋さし　「千　」
　子を引のけて炙のわひする　「久米女」
洗ひがみあら齒の櫛のすへり落ち　「英史」
　ふいと見わわす長谷の回廊　「貞女」
新桶にほとてし水のぬしは誰そ　「暮山」
　荷すれにいたむ馬をいたはる　「竹青」
わたましの門先狹き暮の月　「有年」
　ない隙明けて來たる藪入　「中山」
飛だ直に笊のいわしを賣てなし　「江村」
　男まさりにかせくならはせ　「梅枝女」
さくや花道ひと筋の外もなし　「松露」
　はとやはらかにぬるみ出る水　「壽女」

以下通題

梅が香や首尾して逢ふた四疊半好いたすきやに只
二人　煎茶の手前もいつの間か　みだれてひ茶のむ
つまじさ

○

明治十七年の頃國會開設論盛なりしに大津繪節に唄ひて

すめらみの　おためとて　備前の岡山を始めとし
あまたの國のますら男が　赤い心を墨でかき　國の
重荷を脊負ひつ丶命はかろき旅衣　親や妻子をふり
捨て丶
「國を去て京に登る愛國の士　心をいたましむ國會
　開設の期」
いやな黒雲程なく消えて民權自由に、はるの時節が
ほどなく來るわいな

○

火鉢のじよたんに書つけたる大津ゑぶし

中のよいのが　火ばちと火ばし　またもよいのが
茶に土瓶　ごとくは炭とよくおさめ　これほど中は
やわらげど　水のさしてがうやむやで　やかんはふ
つ〳〵口小言　炭はまつかになせおてる

310
Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

年譜

△此年譜は楳子刀自が如何なる時代に生れ、如何なる時代に成長し、如何なる空氣を呼吸し、如何にして時代と共に推移し來れるかを示さんとするに在り、されど重要なる事項、例へば結婚の時、少年時代の居所等、知る能はざるもの多く、遺憾ながら知れる範圍にて此表を作れり。(石川生)

一八二六、文政九　◎高橋作左衛門露儀を譯して上る△異船七總に來る▲浦田重兵衛第三女として楳子生る
一八二七、文政一〇　◎伊東圭助始て物產學を唱ふ△賴山陽日本外史を著す、西郷隆盛生る
一八二八、文政一一　◎蘭人シーボルト禁錮せらる△　橋作左衛門刑せらる
一八二九、文政一二　◎松平樂翁歿す
一八三〇、天保元　◎高野長英江戸に醫業を開く△耶蘇徒を誅す
一八三一、天保二　佐屋五兵衛米國に漂到す△大久保利通生る
一八三二、天保三　◎渡邊華山海防事務官となり▲景山鹿之丞長男確(宇右衛門)生る(楳子の夫)
一八三三、天保四　宇田川榕庵、植學啓原を著す
一八三四、天保五　水戸齊昭蝦夷を開拓して邊に備んと乞ふ▲楳子此頃父重兵衛と共に流浪せり、父より和漢の學を學びしも此流浪中にあり
一八三五、天保六　◎井伊直弼大老に任す▲景山鹿之丞長女藤子生る　藤子長じて楳子の弟浦田淳八郎に嫁す
一八三六、天保七　◎水戸侯砲車を助川に築く
一八三七、天保八　◎米船浦賀に來る、砲擊す△家慶將軍に任す
一八三八、天保九　◎蘭使江戸に勤す△高野長英夢物語を著す△渡邊華山鈇舌小記及び愼機論を著す
一八三九、天保一〇　華山、長英を獄に下す△中山ミキ天理教を唱ふ
一八四〇、天保一一　鈴木春山、西洋兵制の書あり
一八四一、天保一二　◎水野忠邦奢侈を嚴禁す△華山自殺す
一八四二、天保一三　◎家慶攘夷令を發す△幕府二宮尊徳を召す△種彦歿す
一八四三、天保一四　◎洋船南海に來る▲雪舟、景樹歿す
一八四四、弘化元　◎幕府水戸齊昭、藤田東湖等を幽す
一八四五、弘化二　◎米艦浦賀に來る○英艦長崎に來る
一八四六、弘化三　◎孝明天皇踐作○高島秋帆等禁錮せらる
一八四七、弘化四　◎肥後天草土寇起る
一八四八、嘉永元　◎佐久間象山洋式砲を造る
一八四九、嘉永二　◎諸藩に命じて沿海の防備を嚴にせしむ
一八五〇、嘉永三　◎高野長英自殺す▲楳子時に年二十五
一八五一、嘉永四　◎土佐萬次郎米國より歸り萬國輿地圖を獻す
一八五二、嘉永五　◎周防孝女阿米死す
一八五三、嘉永六　◎錢屋五兵衛磔せらる
一八五四、安政元　◎吉田松陰及び佐久間象山入獄
一八五五、安政二　◎幕府講武所を設く▲楳子時に年三十
一八五六、安政三　◎米國使節ハルリス下田に來る
一八五七、安政四　◎井伊直弼大老たり▲景山楳子初めて女兒さわ子を生む、時に楳子三十二歲、夫確廿五歲なり
一八五八、安政五　◎諸公卿に詔して外交を議せしむ
一八五九、安政六　◎齊昭を幽す△安藤帶刀自殺す△梅田雲濱獄死す△橋本佐内、賴三樹、吉田松陰等斬らる▲楳子長男弘を生む

一八六〇、萬延元　◎櫻田の變
一八六一、文久元　◎外國公使館を御殿山に建つ
一八六二、文久二　◎平野國臣攘夷論を唱ふ、薩人英人を斬る△蘭國に留學生を遣す
一八六三、文久三　◎鎖港を告ぐ▲英艦薩摩に迫す△英國に留學生を遣す
一八六四、元治元　◎佐久間象山及び平野國臣等斬らる△井上馨等歐洲より歸朝す△岸田吟香新聞紙を創刊す
一八六五、慶應元　◎露英佛に留學生を送る▲楳子次女ひで子を生む
一八六六、慶應二　◎幕府再び長州を征す
一八六七、慶應三　◎王政復古△有栖川宮等の幽屏を赦す△坂本龍馬殺さる
一八六八、明治元　◎伏見鳥羽の役△奥羽平ぐ△箱舘戰爭
一八六九、明治二　横井小楠刺さる△新聞紙の刊行を許す△大村益次郎暗殺せらる▲楳子次男淳造を生む、時に年四十四
一八七〇、明治三　◎普佛戰爭に就き局外中立を宣す△小學校を全國に設く
一八七一、明治四　◎散髮脫刀の令を布く△華士族平民の別無く結婚するを許す▲九月楳子の長女さわ子、岡山市の人澤田正登に嫁す
一八七二、明治五　◎東京日々新聞發刊△京濱間の鐵道成る△征韓論起る▲岡山藩に女子教訓所設立せらる。是れ日本に於ける女學校の嚆矢たり、楳子選ばれて其教師となる、楳子時に四十七歲
一八七三、仝　六　◎歐米遣大使岩倉等歸朝す△征韓論の議協はず、西郷、板垣、副島、江藤等各職を辭して郷里に歸る
一八七四、仝　七　◎警視廳を設く△江藤新平亂△臺灣征伐
一八七五、仝　八　元老院及び大審院を置く△地方長官會議を開き木戸孝允ゝ議長に任す▲楳子の弟浦田靜(淳八郎)死去、次男淳造をして其家督を相續せしむ
一八七六、仝　九　◎朝鮮修交條約成る△熊本神風連の亂
一八七七、仝　一〇　◎西南役起る
一八七八、仝　一一　◎地方長官會議を開き伊藤博文を議長とす
一八七九、仝　一二　◎自由黨立つ△紅蘭女史歿す
一八八〇、仝　一三　◎集會條例及び區町村會法發布△國會開設の請願▲楳子の次女ひで子研習小學校の教員を命ぜらる、ひで子時に十六歲
一八八一、仝　一四　◎諸國政黨起る△廿三年國會開設の詔勅下る
一八八二、仝　一五　◎伊藤博文を歐洲に遣し制度を調査せしむ▲板垣退助岐阜にて遭難▲朝鮮暴徒我公使館を襲ふ▲楳子の夫景山確は家督を長子弘に讓る▲此頃「女紅場」と稱する藝娼妓教育所設立せられ楳子其校長となる
一八八三、仝　一六　◎福島事件起る▲楳子は夫及び我子女等と協力して蒸紅學舍と稱する女子夜學校を開く。次女ひで子自由民權論を唱ふ、學校亦た甚だ殷ふ
一八八四、仝　一七　◎華族令を定む△加波山暴徒起る△日清兵朝鮮にて衝突▲楳子の次女ひで子等の運動漸く激烈となるに及び忽ち政府の忌む所となりて蒸紅學舍閉鎖を命ぜらる、ひで子は憤りて東都に走り、楳子等は校名を景山學舍と改めて尚ほ其私塾を繼續す
一八八五、仝　一八　◎朝鮮と和成る▲政府大改革。内閣制を設け伊藤博文首相となる▲大井等大阪事犯▲ひで子大井等の陰謀に與し長崎にて捕はる
一八八六、仝　一九　◎帝國大學校令、諸學校令出づ▲各國條約改正會議を外務省に開く

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

一八八七、仝　二〇　◎名古屋事件落着△井上外相條約會議を中止す△井上圓了哲學館を立つ▲ひで子禁獄の刑に處せられ三重監獄に移さる

一八八八、仝　二一　樞密院を設け伊藤博文議長となり黑田淸隆內閣首相となる△大隈重信外相となり、條約改正問題世論の中心となる▲國粹主義起る

一八八九、仝　二二　◎憲法發布△森文相刺る▲大隈外相爆彈を投ぜらる▲大赦令出で丶ひで女放免せらる

一八九〇、仝　二三　◎自由黨結黨式△議院法公布▲小學令發布▲同志社長新島襄歿▲ひで子東京に實業女學校を設立し、楳子等景山一家族悉く上京、時に楳子の夫確五十九歲、楳子六十五歲

一八九一、仝　二四　◎三條實美死す▲露國皇太子來遊大津にて狙擊せらる▲十月卅日楳子の夫確歿す、府下染井之里に葬る

一八九二、仝　二五　◎豫戒令發布▲議員總選擧▲福島少佐歐亞單騎旅行の途に就く

一八九三、仝　二六　◎相馬家事件起る△衆議院議長星亨の彈劾▲四月楳子の長男弘歿す、享年卅四▲次女ひで子栃木縣人福田友作と婚す▲楳子弘の遺子要を携へて岡山に歸り、女婿澤田氏に寄る、歲六十八

一八九四、仝　二七　◎金玉的米國への途次上海にて殺さる▲朝鮮東學黨亂▲日淸開戰

一八九五、仝　二八　◎日淸平和克復

一八九六、仝　二九　◎板垣內相となる▲伊藤內閣辭職、松方內閣成る▲楳子再び上京、麴町區中六番町なる福田英子と同居す

一八九七、仝　三〇　足尾銅山鑛毒事件起る

一八九八、仝　三一　◎內閣屢々交迭△隈板聯合憲政黨內閣▲楳子孫要と共に神田南神保町に家居す、七十三歲要十二歲

一八九九、仝　三二　◎勝海舟、中嶋信行死す▲楳子要と共に市外角筈村に移轉す。女婿福田氏同村に轉居せしが故なり

一九〇〇、仝　三三　◎義和團北淸事變▲楳子の女婿福田友作歿す▲楳子要と共に神田北神保町に移轉、次男浦田氏の近傍なりしが故なり。楳子此處にて助膜の大患に罹る。

一九〇一、仝　三四　◎軍人腐敗問題喧し▲星亨刺さる▲田中正造直訴▲中江兆民歿▲楳子神保町より再び角筈に移り次女ひで子と同居す

一九〇二、仝　三五　◎鑛毒被害民の大運動▲勞働者懇親會禁止▲砲兵工廠同盟罷工▲教科書事件大疑獄

一九〇三、仝　三六　◎衆議院議長河野廣中奉答文に內閣彈劾の文字を加へ議會解散

一九〇四、仝　三七　◎日露戰爭

一九〇五、仝　三八　◎日露媾和▲媾和反對國民大會騷擾

一九〇六、仝　三九　◎電車値上反對騷動

一九〇七、仝　四〇　◎足尾鑛山暴動▲楳子の次女英子、半月刊雜誌『世界婦人』を發刊して婦人解放を唱ふ

一九〇八、仝　四一　◎諸方同盟罷工頻々

一九〇九、仝　四二　◎一月十八日午後八時、景山楳子東京府下豐多摩郡淀橋町字角筈七三八番地次女福田英子の宅に歿す、八十四歲

追懐

涙下り書く能はず

澤田正泰

『澤田氏は楳子女史の長女さわ子氏の良人なり』

以來何の御障りも無之奉賀候、扨十日祭御執行之事と存候、母上様逸事雜誌に云々承知致候、種々相考え候得共、來書は要向而已にて別段の事も無之、發句のありし書面ありし哉と相搜し候得共不見當、想ふに別紙の意味に似よりたる事而已と存候、別紙は一昨年正文歸鄕之際、伏見人形一個と共に托されし和歌にて、御傳言に、此人形は長年大切に持ち居りしものなるに付、之を形見に送り可申、御夫婦とも自分の年にアヤカリ御長命被成度、種々御厄介に此年迄生き延び是迄の御恩は地下に祖父と逢ふたる際、泣て相語り相悦び、澤田家繁昌を草葉の陰にて相祈り可申、實に死しても忘れぬと父母に傳へ吳れよとの事なりし、正文も過日悔狀の文通に又此事を繰返し申越せり、此言を書くにも涙下り書く能はず、

楳子刀自明治十三年の撮影（即ち五十四歲）

實は當春四月頃には必ず出京、久振りに御目に懸り度と姉上と共に相樂み居候處豈圖んや墓參をする事の不吉に相成りたるは如何にも殘念の至りに存候、拙者事、近年痰にて苦しみ、寒さの時分格別甚敷、療方も別段無之溫かにして外出を避け居る次第、春暖を待て必ず上

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

京の積りに致居候。

別紙の和歌は自分に對する感謝の意にして且絶筆なりき、之を雜誌に出すは感を賣るに當り自分よりは致し難く、唯母上の志バエを言ふ而已に候間篤と御熟考を煩し候、別紙は原筆を透き寫しにして字体は似寫りをれり、他に心當り無之、

右要用まで早々

一月廿八日　　正　泰

英　子様

淳　造様

要　　様

今は心細く候

澤田さわ

『さわ子氏は榛子女史の長女なり』（編　者）

一筆申し上參らせ候、……中略……扨は母上さまま御病氣御養生相叶はず御互に殘念に存候、御兩人さま御病中の御看護も御行屆きなし下され母上も御滿足の御事と存候、私も上京御看護致す筈に候らひしが、兄上疲にて、閉居遊ばされ、それゆへ御無沙汰に相成惡からずおぼし召し被下度候

母上御死去後、寫眞を出し、備へ物致し心斗りの御祭り致しおり候、御存命ならば心丈夫に思ひ候もいまは心細く悔居り候、要どのへ御悔よろしく御傳へ下され度候

其他御世話に相成候御方へ宜しく御禮御傳へ下され度候　早々

一　月　　姉　　さ

英子どの

淳造どの

二伸御兩人さま寒さきびしく候間御身御大切に祈上候未筆ながらしげじさまへ宜しく御子さま方へも宜しく御病氣の御子さまは如何がに候哉御たづね申上候

骨肉の情

在京都大學　孫　澤田正文

一、今昔の感に堪えず

學校から歸つたのは、そう一正に午後の五時半だつた、嘉吉君とハッタと門前で會つた、叔母さんから御手紙が來てる机の上に載せて置いた、僕は一寸之をポストに入てくれと示されたのは叔母さん宛の手紙だつた、下鴨の書窓傍に殘る暮の色に御文通の趣を拜讀した、終日晴か曇りか定めなき寒空は北山の風に誘はれて悲雨瀟々の韻を斷して行人頗る稀れである。今宵は村の若者の音頭もねつから聞えぬ、淋しい夜だ、「杜鵑なれもやもの、はうれわしき、糺の森を行き返り鳴く」とある糺の森の片ほとり草廬に座して獨り思に耽けつて居る、五月雨に橘の香が溢れて居る斯節でないで杜鵑の一聲てそ聞くことが出來ぬが故人を忍ぶ涙は五月雨に劣りはせぬ、死を悼んで斷腸の思に堪えぬは血に鳴く杜鵑の一聲を聞く以上だ。人生の始期は笑で迎へられ終期は涙で送られるのが一般的原則だ、今や僕は故人の終期に對して涙を流して居るのだ、骨肉の情は又格別だ、偏狹かも知れぬが人情だから致し方もない、凡て故人を忍ぶと云ふ事柄自體が過去の記憶を新に喚起するとでかくあるが爲めには、劣故人に對して多くの智識を有して居なければ、悲哀の情を催はすと深刻ならざるを得ぬものである、骨肉の關係にあつては多くの場合に就て、事情を知る事深さが故に從つて思ひ出の節々に對して痛切に死てふ反應作用が悲の意義を附するものではあるまいか。この現象を他人の上に想像して其處に始めて同情が成立する。どうしても凡ての行動の歸因する所は自己中心にある樣だ所謂人情の自然は即ち之れだ、死とは如何、心臟の鼓動停止の狀態である、然らばこの狀態に對して何

313

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

故に悲哀を感ずるのであるが自然界の一現象たる不可抗力に基く變化に何の悲あるべき筈はないでないか、人間界を超越して大宇宙を觀察する哲學者は別として苟も人間が感情的動物たる以上は理論一方のみを以て推すとは出來ぬ、人間社會は理と情との混合體である、理は疑の解決に對する精神作用の經路だ情は變化に對する直覺的精神撹亂の狀態即ち精神的反射作用だ、茲に於て死てふ變化は吾人の精神的反射作用として、習慣的に悲哀の發情を誘起する導火線である。悲哀の發情は一一方向を過去に取る茲に吾人は20有餘年の記憶を追想して舊を傷み故人の面影を復活して今昔の感に堪えざる次第である。

二、吾が幼少の記憶

過去を顧みて深く吾人の頭腦に印せられたる自叙傳の稿には五、六歳の子供が野田屋町の學舎に蝶を追つて遊んで居る書入の記事がある。滄桑の變で學舎は荒癈に歸して畑となつた、咿唔の聲は再び此處に聞くとは出來ぬ、何も知らぬ野良男は鍬を杖に頬冠りの儘で呑氣に憩の烟草を吹かしてをる、その昔二階立の學舎が幾多の青年婦女を收容して無邪氣な聲が響いていた面影は只に書入の記事に思ひ起こす計りだ、御祖父樣は入口に頑張つて机上の鈴を時刻毎に鳴しつゝ、鼻水を啜つて烟草盆へ烟管をカチカチとやつて居られる、口さがなき頑童輩が「夜中を過ぎて穴堀る虫はごぎんかきんか……」と罵しりつゝ外へ駈け出す、御祖母樣は教室の東隅に座を占めて習字を敎へてをられる。僕は「桑の葉があいたら櫻に留まれ……」を片言交りに歌つて居た時代だからイロハのイの字も知らない、菓子を頂戴するのが唯一の樂みで稽古の濟む迄荒やんに遊んで貰らつて、待つて居た御祖母樣が歸つて見えると頭を撫られながら菓子を戴き膝に凭れて話を聞きつゝ眠つてしもう、目が醒めると夢地の中に宅へと送られてをるのが常だつた。この時分が御祖母樣を記憶して居る始めである、間もなく一家東京へ移住せらるゝとゝなつて御出立の日には京橋際迄母上に連れられて見送りに行つた。御祖母樣が見送りの人々に挨拶をされて居つた樣子は今も鮮かに殘つてをる、小供心にも訣別の如何なるものなるかを知つた、再び岡山が御祖母樣を迎へた時は御祖母樣は白髮の老人であつた、要君が尋常二年で僕が四年生だつたと思ふ笹の葉摺れに何となく淋を感じ、竹林に宿倣る雀時のさゞめきに夕を告げ入相の鐘に暮れ行く納戸の一室に御祖母樣は熱心に要君に讀書を敎へて且つて倦んだる氣色も見えぬ、自分の貰らつたものは皆要君の爲めにとつて置かれるその慈愛心に富ませ給ひ寢食を忘れて要君の保育に意を注がれたとは一通りではなかつた、目に入つても痛くない、と云ふ形容は恐らくこの樣を云つたのだろう、燒野の雉子夜の鶴と云ふと顯及ばざることと遠し、祖母の愛は母に二倍すると云つてる人があるが眞に過言ではあるまいと思ふ、御祖母樣の慈愛に再會して樂しい、月日は水の如く流れ去つた、此の時正記が生れて長の間御祖母樣は御面倒を見て下さつた、常に脊上に弟の微笑と泣聲と無邪氣な惡戯とを見聞して居た、成る程、僕等の生れた時も同事だつたのだと感謝せずには居れなかつた、お前に弟が出來た嬉しかろうがとは毎々承はつた言葉である、再び東都へ去られた後は實に寂漠を感じた、御祖母樣は此處へ居らるれば宜いのにと幾度思つたか知れん、

三、東都の拜顔

三度目に御拜顔の折は明治三十七年九月から四十年九月の三ケ年間で東都遊學の時である私も年が寄つた最早長くはあるまい何でも要が一人前の男となるのを見屆けて他界したいものだ存つてこう云ふとがあつた、お祖父樣がおい〱淋しくてならないから早く來て呉れないかと手招きしつゝ迎へに來られたと見しが、之れは夢だつたのだろうか、何にしろ不思議な事もあるものだどお元氣ではあつたが御顔の皺は當年の面影をとめて居なかつた、且つて眠つたふ膝元も歳月には、勝てぬ弟が嘻々たりし脊上には羽毛も堪えぬ風情た御訪問のたび毎に國元の安否を問

314
Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

はせられ、小生の誕生より說き起こして父君に及び感嘆措かせられず、「八十の坂にのぼりて見かへれば孫子の杖に、身はすがりつゝ」と短冊に書して給つた、勿體ない次第である、時に觸れて往事を物語つては昔の家庭が如何に嚴格であつたかを追懷せられて居つた、封建思想に基く絕對の服從關係の下に姑なる者が非條理の壓制を實行して徒らに妻女を苦しめて居た有樣は推察するに難からぬ、家庭組織の根本的觀念は形式に拘泥したる權力關係である家庭を組織する各員の地位は豫め高度の相違を示して服從的段階の規範を[illegible]するとは出來ぬ、妻女なるもの、地位は自己の犧牲に外ならぬ、命令に違反する行爲は凡て道德に違反したものと解せられてをる、是非の沙汰は問ふ限りでない、この時代に於ける妻女なるもの、、定義は家庭組織の一員と云はんよりは寧ろ家庭に使用する動物的器具也と云ふが當つて居る時代の思想は各時代社會制度の反映であるから、必然の必要に迫られたものだ、筆の力も鋭いには違いないが武斷政治の世には赤誠の支配に屈せられざるを得ない世態は變化なるが故に凡て漸を追ふて進む所に從はざるを得ぬ、理想論として個性の發展國家の改善を唱導するに際して勿論さうも行くまいが處世の便宜手段としては之れ以上なるを得ぬ、御祖母樣の懷舊談を思ひ出す每に內心に返響する思想の囁は之れだ、人に一長一短あつて時代に表裏一樣の方面あり之れ自然の數である、現在の Dark side を悲觀して復舊を夢みる保守主義もいけないが同じく悲觀して未來の建設を絕叫する進步主義社會主義も極端だ、保守的進步主義によつて現在を離れぬのが時宜の策であるまいか、

四、多藝の人

御祖母樣は頗る多藝の人であつた婦女子の一應心得べき凡ては勿論和歌、俳句、文學的の事項に亘つても蘊蓄淺からぬ人である、優に一世の師表として恥しからぬ人と敬慕して居つた、作物は去る二十六七年岡山洪水の砌に流失してしまつたので紙面に躍如たる一節を窺ひ知るを得ぬのは極めて殘念である今記臆に存して居る俳句は一首しかない、それは「何處迄も、月に友あり、遠歩き」と云ふのである、題はト、ト、ト、と云ふ即題だつたのだそうだ、洛陽は花の都で月の都だ淋風秋雨二千年の帝都を洗つて杖を拽く所は詩興到らざるなし、秋宵長安に懸る一片の月光を浴びてそこはかとなき徐ろ歩きに故人の句は常に腦裡に浮んで居た、この句は御祖母樣が三枚寫しの錦繪の樣だと評せられて居た時分の吟咏だそうな先日別れたあー云ふ面影の御祖母樣が美人だともちやほや騷がれた時の月に對する感想が之れだ優にやさしき方もあり今や句のみあつて思ひ出のよすがとなつた。

五、悲哀に滿ちた袂別

去る四十年秋九月、小生東都を去るに臨み御祕藏の伏見人形を父君へ托送せられて曰はく「恐らくは後會期なかるべし、多年の高恩は妾他界の日、父祖に語りて共に泣かんのみ、妾此高恩を思ふて平常甘つて西天に足して寢ねたることなく朝暾を拜しては餘光の深きに感謝し居たり今汝東都を去るに際し報恩の萬が一にもと伏見人形を父君に捧ぐ、伏見人形や之れ妾が年來所持せし、唯一の物也、妾身分不相應に長命せり、父君の千壽萬歲ならんことを祈り且つは形見の意を偶して之れを汝に托す、母君に宜敷妾が意を傳へ併せて貴家の萬福を祈る、幸に自愛せよ」と、最後に聞き得た、御言葉の意を體して僕は業條の客となつた、悲哀に滿ちた袂別の光景を僕涙なしに見捨て得たゞろうか、鬼の目にも涙ありとか至誠は鬼神をして泣しむと東洋的豪傑だの健兒だのと威張り返つた腕白者も涙にひぢて紅塵の巷を去つた、恰も前途程遠、思走雁山之暮雲、後會期遙、纓沾紅廬之曉涙、と云つた調子だ、父君も御惠與の伏見人形を戴いてあゝ勿體ない感心なお方じやと暗涙に咽んでいらつしやつた、御祖母樣が永眠の報に接した當日追悼の意を表して涙ながらに伏見人形の記事を申し送り記憶を新たにして其

315
Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に泣いた、父君からの返書として借景山老人の貴殿へ托候伏見人形送與の義縷々御申越涙下り讀む能はず痛歎事誠に面語も不致殘念に存候、とあつた、嘉吉君にも思ふ、僮を語つて共に謹愼して吊意を表して居る。

六、總ては涙である

要之に御祖母様の悲報は全骨肉の血涙を搦つた年から云へば御不足のある筈はない、乍併死なる變化は前言せるが如くに悲哀愁傷の發情を誘起する導火線である、馬琴は云つてをる情に到て景を思ひ景に到て情を起こす脆さは人の心なるかなと然り、而して吾人はその人を知りその人と、密接なる關係ある場合に就て深刻なる悲哀を感ずるものである、之れが例證は新聞の三面記事を見てもわかる、同情を催すべき例外の場合を除いて諸者は個々の記事に散見する人の死に付いて悲嘆の涙に暮れて居るや否や恐らく冷淡なりと決論するが至當だらう、吾人の血管を流れて居る處の血液は御祖母様の血液には極近い七年毎に人體組織は一變するものだと云ふ説もあるから或ひは前説は誤つて居るかも知れぬが、習慣による素人的の觀察はどうしても前説を是認する、この血の濃いふ即ち血族たり、同族たりと云ふとは相互間の關係の密接なるとを、附隨の條件とするものである、死と云ふ作用は生きてをる相互間の情愛的關係の一方的斷絶である、此關係の斷絶は悲痛ならざるを得ぬ『七年更新説によるも自我なるものは始終一貫して居る、この始終一貫せる獨立の自我なるもの丶双對的關係の斷絶が何故に悲痛なくや之れ斷絶てふ一種の現象のみと説くは哲理に走る辯論にすぎない、更に一歩を進めてその關係なるものが理の作用なるか情の作用なるかを研究せねばならぬ、苟も情の作用に屬する以上その關係の斷絶は感情の變化である、と云はねばならぬ、而してその關係の密接なれば密接なるだけ反作用として表はれる、感情の變化の大なるとは物理學の定則と同樣である、全體物は觀察の方面により種々に解せられる、死なる現象に對しても同一である併し乍ら吾人の主觀は學理を以て此現象を解釋すへき秋にあらずして情の爲めに理の破れるのが當然なりと云ふべき心理作用の働く時である、遂に行く道とは兼ねて聞きながら昨日今日とは思はざりけり」と云ふのが誰にしも起る感想たろう、業平朝臣のこの歌は能く一般の人情を歌て居る、僕の御祖母様に對する吊意は次の如き古人の句同樣だ。

「御深草の染井の櫻心もあらばこの春ばかり墨染に咲け」(本がないからわからぬが意味は違はぬ)、雨は止まない涙も降る隙間もる風の寒いと落つる涙も今宵は氷りそうだ思想上に生きたる偉大にして慈愛の結晶體かと思はれる御祖母樣氣丈なりと蒲柳の質にませしまされた、御祖母様は全生涯を通じて不幸の中に御永眠遊ばされた今頃は御祖父様の御傍で浮世の變轉と憂き困難の數々を御物語りして居らつしやるだろう、生者死し會ふは別かる丶也人界の常理なりとは雖花を散らす無情の風に恨なき能はず染井の里に日は暮れて夕の烟片々たる時白玉樓中の囁ぎや何、浮世の風の吹き止んだ墓所の中に眞の平和はあるだろう、夜の嵐も月影も平和の里には訪れもしまい、下鴨の草庵に故人を忍ぶ僕に這般の凡ては涙である、(完)

爾曹生命の爲め何を食ひ身體の爲に何を着んとて思ひ煩ふ勿れ、生命は糧より優り身體は衣よりも優れり、鴉を思見よ稼す稲す倉をも納屋をも有ず然れども神はなほ此等を養ふ、況て爾曹は鳥よりも貴きこと幾何ぞや。(路加十二章)

316
Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

備前の閑谷黌

安部磯雄

今より廿二三年前の事であつた。余は一日有名なる備前の閑谷黌を訪ふた。黌は岡山市を東に去ること五里許り四方小丘を以て圍まれたる谷間に設けられて居る。校舍、寄宿舍、教師の住宅及び數個の民家の外には何もない實に閑靜な處だ。講堂は誠に立派なる建築で、丁寧に拭き清められたる板張は恰も鏡の如くに光つて居る。毎朝五時には教師も生徒も此處に集まり、生徒は圓形の漆の敷物に坐して教師が論語を讀むのを傾聽するのである。講堂に隣して六疊の坐敷がある。亦其次に四疊半許りの部屋がある。此坐敷と部屋の間には、半間許りの爐が切つてある。備前の名君として知れたる新太郎少將が折々閑谷に來つて數日間滯在せられたる時には、自ら研學するの傍ら、好んで何人にも面會せられたそうだ即ち少將は六疊の坐敷に、來客は四疊半に唯半間の爐を隔てたゞけで自由に談論せられたそうだ。百姓などの爲には實に得難き好機會であつたのだ。

今や閑谷黌は全く過去の遺物となり果てたのであるけれども、過去二百有餘年間備前の教育界に貢獻したる此學校の事を追想すれば、吾人は教育事業が眞に永久的事業であることを感ぜざるを得ない

余は岡山縣人ではないが、殆んど十有一年の星霜を岡山に送つたのであるから、多少岡山縣人に關しては知識を有して居るとの自信がある。岡山縣人の教育はこれを他縣人に比すれば慥に優つて居る所がある。啻に多くの學者を出して居るのみでなく、一般に教育が普及して居る。殊に女子教育の盛なることは何人も感服せざるを得ない所である。余の所謂女子教育とは必ずしも現今の教育を言ふのではない新太郎少將以來養ひ來れる教育熱は少からぬ感化を女子にも及ぼしたのである。故に岡山縣の婦人は概してインテリゼントである。別言すれば常識に富んで居る

此度逝去せられたる景山楳子女史の如きも慥に代表的岡山婦人である。女史は現時の教育なるものを受けなかつたけれども、舊藩時代に於て婦人の受け得べきだけの教育を受けて居る。而して其受けたるものを利用して其當時既に自ら女子教育に從事せられたのである。余の友人には此の如く舊時代の教育のみを受けて然も現時の婦人を避易せしむべき識見を有して居る多くの岡山縣婦人がある。余は此等の婦人に想到する毎に閑谷黌が間接に及ぼしたる感化の如何に大なるかを感ぜざるを得ないのである。

心ばかりの御拜

澤田正泰

前略陳は先般來よりして何に角と御配慮殊に昨今は格別之御多忙と御苦勞に被存候、全體拙者及姉上も參京可致本意之處、其意を不得相濟まさる次第なるも不惡御了承被下度、想ふに本日當り御送葬之事と存じ、今朝一電をさし出し置き候次第、岡野とめより度々文通も有之、御母樣の御樣子をも略承知致し候、昨夜は御トギヤも可致、定めし錦地に於ては其事有あらんと噂しセメてもの事にと寫眞三葉を祭り心斗りの御拜をなし、當分相祭る積に御座候、實に容易ならざる御配慮と相察し、此先き費度の事も可有之、一應御手透に相成り候上は凡そ積り豫算を以て諸入費金の義御申越し有之度候、送金取斗可申候右は一應の御挨拶旁姉上よりも宜敷との事に候早々

一月廿日　　正泰

さわ

英子樣

二伸、浦田及要へも宜敷、全體浦田へも別紙可差出之處、今般は御沙汰仕候、尚下より御取成被下度候、小牧氏其他世話に相成り候諸子へ宜敷御傳聲之事。

317

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

母の務

小野吉勝

誰か賢き女を見出すことを得む、其價は眞珠よりも貴し……彼女は能力と尊貴とを衣とし且つ後の日を笑ふ。彼女は口を啓きて智慧をのぶ仁愛の教誨その舌にあり。彼女はその家の事を鑑み、怠惰の糧を食まず其子等は起つて彼女を祝す『箴言三十一章』、

一

紀元一九〇八年の正月はて、數十年間稀に見るの寒さなりき。降雪相つゞこたび、氣元旺盛の若者すら其起居進退を懶しとせるを、況んや年老い氣萎えがちの老人にありては、其寒さに冒されたふるゝもの、尋で永久の眠りに入るもの、不幸頻々たるを聞く。

我が福田英子女史の母堂景山楳子の君も亦其不幸中の一人として、十八日の夕終に其鶴の如き清軀を森厳暗き角筈の寓居に遺めて、大御靈は遠く天上に天駈けり給ひぬ。天壽徒らに長きを願ふは萬人の至情なれど、八十有四の高齢、また短しとせんや

二

予が福田女史を知り且知られしは數年前平民社時代にありきと思ふ、爾後平民社の解散已むなきに至り予も亦去つて新紀元社先覺の袖をくゝるの一瞥見とはなりにき、新紀元社！、新紀元社に於ける吾等後進青年の歡喜と祝福とは實に大なるものありき。

この時よりぞ尚深く女史と相識るに至りたる。

惟へば予は實に直情徑行の性にてありけり今も猶然るが以前は一入なりき。而して情の奔逸する所こゝに精神上醫すべからざる一大痛擊を受けたることありき。此痛擊をいかに醫せむかとは、血湧き肉躍るの當年血氣の予にとりての大煩悶なりき これより他に天地狹かりし予にとりての大懊惱なりき。こは之れ今より見れば一場の悲劇を薄紙を隔てゝ見るの慨あるに似たれども、當年の予には面と接して最も痛切に感じたるを奈何。

而して當時苦悶焦悴の予に深厚なる慰藉と同情とを寄せられ、甚大なる訓誨と激勵とを鼓吹せられしものは、實にわか福田英子女史なりしなり。

この一點予か特に女史を德とする所、これよりぞ一入親しき交誼を忝うするの幸を得たりける。

三

斯の如き事情は遂に予をして親しく母堂の君にも屢相接するの機會を與へぬ。

予が見たる母堂の君に人品殊にすぐれ其容貌一點のせせつてましき、いらいらする、物を苦にするなどの暗影なかりし綺麗清浄なる方なりき其若かりし時は定めて美はしき方なりきむなど常に思ひ浮べたりき。

予が角筈の宅を訪るゝや毎に茶の間一國の城主として彼の黑光りせる箱火鉢の前に安座し居たまひたりき。さはれ予は母堂の君とは親しく物語りたることは稀なりき。

予が彼女を知れりといふは、其事績を福田女子等に傳聞せる物語を、眼のあたり其すぐれたる人品と照らし合はせ見て、いとゞ床しく懐かしき思ひの禁めかねたれば也。

四

予は玆に福田氏母堂の君の事績をことごとしくものせむとする者にあらず、此の如きは別に其人あり予の與らざる所。

さはれ予は玆に特筆したき一感想を有す。

福田氏母堂の君は實に八十有四の高齢を迎へ給ひて後、悠々として思ひ殘す所なく、永久の眠りに就き給ひぬ。

由來『人生は痛苦の浮世なり焦熱の火宅なり』と、いふ。又曰ふ『人老ゆれば恥多し』と然り人生は實に痛苦の浮世、焦熱の火宅なり。さるを彼女は生を此浮世に享くる星霜八十有四。諸般尋利思想打破の急先鋒として自由民權を皷吹し、暴横、虚僞、悲慘の濁世と苦戰惡闘しつゝけて其老後に及び給ひぬ、されば光榮こそあれ彼女には何等老いての恥辱あるを見ず、爲すべきことを成し遂げて悠遊自適火宅を離

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

越せりし彼女には何等の思ひ残す所思ひ煩ふ所なかりしなるべし。

ソロモン曰く『白髪は榮の冠冕なり』と。實にや白髪は長き人生に於ける苦戰奮闘の勝利の好紀念また榮冠なり。『我れ世に勝てり』の思こそ彼女が最後の呼吸をいかに飾りけめ、

五

彼女は實に明治專制時代に於ける自由民權の急先鋒なりき。而かも私かに惟ふ、神は彼女を以て單に自由民權を主張すべき女丈夫兒等を生むの機械となし給ひしにあらで、人として、當に要求すべき特權を主張するの女丈夫兒等を教養することによりて人の母たる最大最奥の務を果さしめしにはあらざるかと、これ予が茲に特軸すべく感じたる一事にてそありけれ。

人は皆親てふこゝろを有す、其夫たり妻たるものが頓て父たり母たるてとを望むてれ人情の自然也。其子女を教養することによりて人は甫めて親としての最大直奥の務を完うすなれ今之を景山楳子の君に見る、其子女の世に善良なる市民、神に屬せる忠實なる人の子として、放々營々其全心全力を女子覺醒運動のために盡せるの一事を以てするも、母堂の君たる者宜しく榮光の冠冕を戴きつゝ、微笑んで安らかに上天したまふべき也。

實に此子女ありてこそ眞個新天新地の幕は開かるゝなれ。

六

彼女の老後は實に平和なりし樣見受けられたり、其爲す所を成し遂げて今は何等の思ひ遺す所なく、餘命を樂んで悠々自適せられしものゝ如し。

而かも聊か直言を憚れど、福田家の今日の生計は裕かなるものにはあらざる也。之れ婦人の開發を以て己のが任とし、足らざるの資を割き以て其全力を擲ひ、只管其及ばざるを憂へつゝ多大の犧牲を拂ひて世に貢献せんとせる女史一家に取りては又已むを得ざる也。同情に値すと雖此の如きは菓の素より期する所。當然なる運命也。

女史が其一身を犧牲に供し延いて前途に希望滿々たる無邪氣の二少年を抱へたる其一家を犧牲に供せるを見ては惻隱の情に堪へず剩へ餘命幾何もなかりし老母の君を擁せるに至つては凄絶又慘絶を極めぬ而かも女史や日夜生活のために、婦人覺醒運動のために忽忙の身を以て其老母の君に奉仕すること實に忠實懇切なりき。而して其女の使命の如何を知悉し同情せる老母の君が、『悲哀は嬉笑にまさる』の意氣信念を以て、貧に居て心志を紊し平和を失ひたまひしことなきに至りては、實に敬服に値せずや。

七

或人曰く『母は墳墓の中より此世を治む』と、一言此に想ひ到れば、曇りがちなる胸の悲哀寂寥の影てそ忽に雲散霧消、天日を仰いで常陽の崇美端厳い感に推たるゝの慨なからでやは。母の感化の力も亦偉なる哉。

福田英子女史の母堂景山楳子の君は終に其遺骸を暗々たる白楊地下に委ねて、其靈魂は遠く天上至靈の樂園に逍遙したまひぬ。

予、其永眠せらるゝ前夜何心なく負笈を訪ひしが、多人數の集り居らるゝを見て何事の起りしにやと、つと室に入れば、『老母危篤なり』と。多人數と見しは親族の人々なりき。而かも老母の君は應答確かなりしを、越えて翌日遂に起たずなり給ひにき。噫。

あはれ城北染井の墓地よ、願くは永久に平安なれ

それ掩れて露れざる者はなく隠て知れざる者はなし。是故に爾曹幽暗に語しことは光明に聞ゆべし密なる室にて耳に附言しことは屋上に揚るべし　（路加十二章）

319
Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

320

祖母上の感化

在京都大學　孫女婿　本城嘉吉

二十六日の午後、福田の伯母上から、御端書が來た……一景山の祖母上に關し何か感想を書いて送れ期日は二十七日迄だ。……と。

甚だ時日切迫だ。若し逸話等に關してなら思ひ出す時間が入用だから、到底書けないが感想は直感である。感じた儘である考へて書くのは、感想ではあるまい。

僕は不幸にして、祖母上に拜顔の榮を得た事が、生涯に僅か二回しかない。それも兩度合して、漸やく三十分間を出でまいと思ふ。

これは四十年の暑中休暇に東京へ遊びに行つた時、及び東京を去る時の二回である。

且つ僕は結婚の結果として祖母、孫の關係を有する樣になつた者なのだから、祖母上に關する何事をも殆んど知らない。だから、明確な限局的な、感想と云つては起りようかない。否起こす可き材料がない、僕は祖母上に關して全く無智識である。此故に僕の祖母上に對し來る感想は當然の結果として極めて漠然たるものとなるのも實に止むを得ないわけであらうと思ふ。

祖母上の御逝去を知つたのは十九日の正午である。十九日は例の通り朝は七時半頃に學校へ行つた。内科と病理學の講議を濟ませて、寄宿舍の食堂へ行く途中、大學正門前で正文兄上に出會した。

祖母上の御他界は、實に茲で兄上のお口から聞かされたのである。……聞いて僕は愕ろいた。只驚ろいた。驚くと共に、朧に記臆してゐる祖母上の面影が、此時ばかりは明白に頭に浮んだ。

僕は實に祖母上の御他界を聞いて、堪えられない氣持ちがする。僕は昨年僕自分で重病を患らつた結果として、死なる事實に對して非常に神經質となつた。知人の死を聞く度毎に堪まらなく胸苦るしい。斯樣に死に對して過敏になつた。其頭へ祖母上の御逝去を聞いたのである。

此時の僕の感想はどうなるものだらう？　如何なる狀態を保持す可きものだらう？

僕は只呆然自失して祖母上の死とは獨立せる死其ものに關して沈思しつゝ机の前に端座した。沈思の結果は以前に得たるもの以上を得ない。沈思より覺めて祖母上の死に想到した時、自然の涙は僕の心臟から出た。

此夜は深更に至る迄、正文兄上から色々と祖母上に關する、御生前の逸話を謹聽した。祖母上の偉大なる、女丈夫に居ました事も、明かに意識する事が出來た。非常に尊敬す可きお方なる事も、了解した。

而かし此等のお話も、祖母上の御逝去に對する、僕の感想上には、明治四十年の暑中休暇に、御話した三十分間の其記臆以上に有力ではない。茫然たる記臆は時に反つて、明確なる部分的記臆よりも其人を忍ぶに、より以上有力な場合がある。特に思想上に於て度々左樣である。僕の頭に殘る茫乎たる祖母上の御面影と御言動とは、何とは知らず偉大な力となつて、僕の頭腦に働らいて居る。

全體偉人を始め英雄豪傑などの感化と稱するものは總括的に感受す可きもので、部分的に感受す可き性質のものではないだらうと思ふ。

偉人豪傑の面影を忍ばんとする際に余りに細かく、其性格私行に渡つて、研究するのは、誠に有害無益である。總括的に茫然たる處に、偉人豪傑の言はれぬ美點を認め得るので。楠正成、兒島高德の忠臣と雖も、小中學校程度の歷史に依りてこそ國民に偉人豪傑の良感化を與へるが重野博士式に研究しては偉人の感化は零である。勿論學問としては別問題だ。

夫故僕は祖母上を深く知らないのを恨みとしないのみならず寧ろ無上の幸福として亡き祖母上からの有益なる偉人的大感化を感受しようと期して居る次第

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

である。終りに臨んで僕は謹んで此偉大なる女丈夫を吾祖母上と仰ぎ得たる光榮を謝するものである。

親の死

木下尚江

△世には、我が親を知らさる人是れあり又た我が親を尊敬すると能はざる人是れあり、是等の人々は世の最も不幸なる者と言はさるべからず、古來心の荒れたる人々を見るに大抵皆な此の種類なり。

△我が子に財産を遺さんとて苦心するは、世間の親の常態なれど、是れ斷じて誤解なり若し眞に我が子を愛するならば、金錢を遺して安樂させんなど愚劣の根性をこそ先づ悔悟すべきなれ、親の唯一の遺産は其の品性なり。

△親を亡ふて心に狼狽せざるもの無かるべし、親を亡ふて狼狽するは啻に吾人凡劣の徒のとのみに非ずして、古來俊秀の達士皆な然らさるは無し、兼ねて覺悟したるとも、愈々其の場になれば諧俳に屬して心胸茫然たり。然り而して人生の秘義は此の間に潜伏し、又た此の間に活動するもの丶如し。

△「永遠の生命」は親の死亡に於て始て、之を切實に體味するとを得。

△人若し生れんと欲せば我が人格に反省すべき也。

△世に顯はれたる人には、必ず隱れたる祖先の犧牲あり。

△人の世は苦惱多し、去れど感興また深し。吾人は之を呪詛せさる也。

最後の拜顔

在山形　孫女婿　澤田豊丈

拜啓祖母上様には兼而御病氣之處、御養生其効なく先日御逝去之由、誠に痛惜之至りに奉存候、平素祖壯健に被爲渡候へば、未た俄に斯様之事可有之とも思寄り申さゞりしに斯くと知りせば先日出京致候際相顔之榮を得置くべかりしにと今更殘念の到りに存候、思へば昨年十月中旬當地へ來任之際御目に掛りしこそ、最後の相顔にて候ひき、當時之御面影今尚彷彿として思ひ浮ばれ、轉た悲愁之感に堪へ不申候今少し近りせば是非御葬禮にも參列致度存候へ共、何分僻遠の地には有之、且公務多用之折柄乍不本意御無沙汰致候右は悔迄如斯に御座候

一月廿日　澤田豊丈

浦田淳造様

景山要様

福田英子様

本紙被告事件

△●●●●●●第廿八號事件　豫て讀者の御承知なる本紙第二十八號所掲「最初の敵」と稱する記事の被告事件は昨年地方裁判所に於て編輯人神崎順一氏に對して罰金四十圓の宣告ありしを、檢事は尚ほ之を不當として控訴せしが、控訴公判は其後屢々延期となりて三月中に愈々開廷するとゝなり居れり。

△●●●●●●卅二號事件　本年一月の新年號も亦た警視廳の告發する所となり、本月四日被告石川に對する公判開廷の筈なりしが、それ亦た延期となりて本月廿三日改めて開廷するとゝなれり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

福田のお婆樣

石川三四郎

一、天の使

●去年の暮から、日がドップリと暮れて了つた。今日も日が出ず、明日も出ず、年が改まつてもヤハリ暗雲は福田の家を閉して居た。年老いたお婆樣が床に就いて、復た起たなくなつたのである。そして平生と異つた衰弱の色が、あり〳〵と老の額に印せられたのである。

●福田家は久しく暗雲に閉された。乍併、お婆樣が永眠の光景は如何にも美しく如何にも詩的であつた。お婆樣を迎への天の使が、莊嚴な裝ひをして、初めて福田家の門に降つて來たのは、去年の暮であつた。「雪！」天にも地にも淸き白妙の衣を裝はせた雪、其雪の初めて降りし時に、お婆樣はドップリと床に就いた。雪はお婆樣を迎への天の使であつた。お婆樣が之よりの旅路を淸めんとての神の御業であつた。

●暗雲に閉されたる福田の家は三たび此天使の見舞を受けた。最初の雪で床に就かれたお婆樣は、次の雪には危篤の狀態に陷られた。更に第三次の天使の見舞に接するや、お婆樣は遂に此世の一切の羈絆を斷絕して永久安息の門に向ひ給ふた。嗚呼千九百○九年一月十八日の雪の夜、地上の萬物が悉く白皚々たる衣を被りて、潔く淸められたる夕、お婆樣の靈は實に其八十四年間苦戰奮闘の尊き紀念たる骸軀を離れて靜寂なる天の奧殿に悠々と歸り行き給ふた

⊙人間僅か五十年と昔から言ふ。八十四歲といへば左程惜しい歲では無い。惜しいどころか、此人情薄き、此危險多き、此不潔極まる、此墮落の極に達した。而して金乞食と名泥棒と色餓鬼との外に何物をも存せない、而して又、罪惡と悲慘とに充ち滿ちた此世界に、八十餘歲の今日まで活き長らへて居られたのは、實にお婆樣に取つては大なる犧牲であつたと思ふ。お婆樣が此度の逝去は、お婆樣の爲には最とも安らかなる休息であろう。吾等は自己の悲嘆を挿んでお婆樣を引留むるの權利を持たない。

二、お婆樣と初對面

●予がお婆樣―景山梅子刀自―と初めて相面したのは明治二十九年十二月の頃であつた。即ち福田姉が中六番町の裏住居に詫しき生活を營み給ふた其時其處であつた。其時のお婆樣は既に七十の阪を越された老人であつた。丁度故鄕岡山市なる女婿澤田氏を辭して當時八歲の愛孫要君と共に遙々上京し給ひし時なのであつた。

●予は十四五歲の頃から福田家の人の如くなりて成長した。お婆樣と相知るに至つたのもヤハリ福田姉の媒に依つたのである。景山のお婆樣は予に對しては福田のお婆樣である。予はお婆樣と初めて面する數年以前よりして福田姉から其爲人を聞いて居たそして其甚だ非凡の人であることを想ふて深く敬慕して居つた。「福田のお婆樣」となつて以來の梅子刀自は最早其本來の面目を充分に發揮するの境遇に居らなんだけれども其縱橫の機才と、其負け嫌いな氣性とは、常に眼前に閃めくのを見た。

三、要さんのお婆樣

●併し予が識つて以來のお婆樣は決して才氣縱橫獨立獨行の天才婦人では無かつた。彼女は當時既に全然自己を沒了した人であつた。彼女は既に自己の爲めに此世に生存するのでは無かつた。彼女の生命は一に愛孫「要君」の上に繫つて居たのである。彼女は實に「要さんのお婆樣」となつたのである。お婆樣の手帳の中に次の如き俳句と其小序が記してある。

故鄕の舊宅を賣却　余金にて染井の墓地へ石碑建立。楳は未た存命なれど　朱入にて死者の中間入せしを見て安心。

露の身も風吹かぬ間の命かな

お婆樣自身は既に此時染井の墓地に葬られたのであ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

る。

●僕が知つて以來のお婆様の生涯は、決して得意の時代では無かつたであろう。或時は要君と共に福田家に同居の人となり。或時は末子たる浦田氏の家に居り、又、或時は獨立の一家に要君と共に棲はれたが、いづれにしても隨分不自由を感せられたとであろうと思はれる。殊に尙ほ稚き要君を相手に一家の生計を營まれた時など、側の見る眼にも隨分哀れを感せしめられた。固より生計の貧に窮すると言ふ如き事は勿論無かつたのであるが、併し凛烈たる北風が肌を劈く様な朝に氷りきつた釣瓶を手繰て井水を汲み給ふ時、或は寂しき秋の夕に薄暗き孤燈の下に衣類の綻びを繕ひ給ふ時、殊に神保町に家居して重患に陥いり給ひし時など、今より其光景を追想するさへ悲痛の感に堪え難い程である。

四、大臨終の感謝

●けれど『悲痛』と感ずるのは側面より見た者の心であろう。よしお婆様が同居しない時にも、福田姉と浦田兄とは常に協力してお婆様を守護して居た。よし物質上には充分に滿足するとが出來ないにせよお婆様の心の底では『英子』『淳造』二子の朝夕の伺候が何よりも嬉しく感せられたとであつたろう。お婆様の希望は一に愛孫要君に繋づて居たが、併し、お婆様自己の慰藉は『英子』と『淳造』と及び最も多く其生計を助けられた『澤田氏』とに繋つて居た様である。

●お婆様は大臨終に及んで一點も悲愁悵恨の情を留めなかつた。甚だしき肉の苦しみの中にも『アヽ勿躰無い』『有り難い』『御恩は忘れねぞえ』等の言葉は連りにお婆様の口より聞された。お婆様は深き〳〵感謝を以て此世を去り給ふたのである。

五、負け厭ひと洒落

●お婆様は非常に負け厭ひな、極めて意志の強い人であつた。其位であつたから二割も三割も損な地位にある婦人の身を以て、殊に思想の幼稚な明治初年よりして、種々なる方面に活動するとも出來たのである、此氣性は實に最後に到る迄去らないで居た

近頃老衰の爲に起居甚だ不自由となつたに係はらず常に膝下に居る予等の扶助をさへ謝絶せられて、いつも自ら日夕の便用を足されたのである。

●併しお婆様は一方に於て極めて洒々落々たる氣風を具へて居た。唐詩を愛讀せられ、俳句を賞味せられた、お婆様は自然に洒落の氣風を涵養せられたとであろう。近年田中正造翁は屢々福田家に來らるゝので、自然にお婆様とも懇意になつたのであるが或時翁の來りてお婆様の傍に坐するを見るや、お婆様は茶を喫しながら口ずさみて曰く、衣敝縕袍與衣狐貉立而不恥者其由也歟と、田中翁は額を叩りて大笑した。

六、不起の床

●去年の暮、予は故郷の家の用務を帶びて東京に來た。然るに其時丁度電車賃値上問題が起つて、新聞紙の調子は大分八ヶ間敷なつて來た。同志の渡邊君と幸内君とは市民大會を開かうといふ相談に來たそれから故郷の事は打忘れて了て、奔走し始めた。暮の中に演説も三四回やッた。毎晩後く歸つた。お婆様は其頃より不起の床に就かれたのである。

●十二月廿七日の夜京橋八丁堀に値上反對の演説會を開き。折りから盛んに降り出した雪の中を十一時頃福田家に歸つた。二三日前より床に臥したお婆様は此夜殊に苦痛を覺えらるゝ様子が見えた。疲れて殆んど熟睡した僕は眞夜中に眼を醒した。並で寢て居るお婆様のうめきに喚起されたのである。此時予はお婆様の脊を撫りながら、其甚だ從來の例に異る重き容躰なるとを知つた。

●元日に寢て居るのは緣起でも無いとて、お婆様は威勢善く起き出で、孫たちと共に嬉さうにお雜煮を喰べた。澤山に喰べた『お婆様が、まア』と皆なが驚いた。二日にも起きて、ヤヘリ雜煮で皆なを驚かせた。ソレが三日には疲勞の躰で復た床に就かれた『是では大丈夫』と思はれたのもチヨツトの間でお婆様はヤハリ以前の狀態に立返つた。平生飯より好きな煙草さへ吸へなくなつた。七八日の頃とな

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

つては愈々危急に迫て來た。九日の雪は更に大威力を用てお婆樣を奪ひ去る樣に思はれた。諸方へ其々急報を發した。十六日には孫なる岡野とめ子氏が來る。浦田家より夫人始め小供達が來る。之に福田家の小供も加はりて枕邊を圍んだ。そして此日一日はお婆樣の身も心も甚だ爽やかな樣であつた。されど一山越せば三途の川が近づいたのである。

七、終。焉。

●十八日の朝未明、褥を出づれば庭の松が枝、積雪を被りて撓はんで居る。風烈しくて飛雪紛々、軒端を侵して御婆樣の枕邊までも襲ふのである。

暴風雪　地を捲き　天を捲きて來ぬ　燈火くらき
君が枕邊

昨日までは三分の心もて燃えて居た命の燈火は、今や僅かに二分の心もて燃えて居る。況して危くも暴風雪の襲ふあり、雪を天使と思ひ定めても、人情の悲しみは堪え難きばかりであつた。人々は皆看護に疲れて居たが、唯だならぬ樣子を見ては落付きて休みもならず、折から見舞はれし孫なるとめ子氏等とお婆樣の枕邊に首を鳩めて施すべき手段を講じた。諸方へ再び電報を出す、近所の醫士に急告して來診を求める。其内に昨夜神田の自宅に歸られし浦田氏も來る。淺草の親戚なる醫士小牧氏も次て來る。けれど時は既に迫つて來た。紛々として雪は渦巻きつ降り續けて居る。

●夜に入つた。ソク〱と雪の降り積む靜けき音の外、人聲足音、共に絶えて、余世界は自ら白衣を被りつゝ僅かに寂寞の呼吸を繼けて居る。『お婆樣!』突如として悲しい叫びであつた。英子姉の聲であつた。サテはと人々は一度に走せ寄つた。『お婆樣〱』『お婆樣、聞えますか』『アヽ、モウ、分らない』『お婆樣』『お婆樣』『私、分りますか、お婆樣、私、誰です?お婆樣』『お婆樣』『お婆樣』『苦しいですか』『お婆樣、私ですよ』皆が聲々に呼べど、反應は愈々微になつた。聲は口より外に出なくなつた。呼吸は益々淺くなつた。『要さん近くお出で、俠さん!千秋さん

へるお婆樣に取つては、雪は實に尊き天の使であつた。限り無き安息の門にお婆樣を誘ふべく雪は天地萬物を潔く清めたのであつた。且つ夫れ別項の傳記が示す如く、明治時代の婦人界に於ける景山梅子刀自は、恰も雪中に咲ける一輪の梅花であつた。あゝ彼の萬花に魁けして其苦節を守つた梅子刀自は、復た此の白雪皚々たる世界を眺めつゝ遂に永遠の旅路に向ひ給ふたのである。

最うお婆樣と話が出來ないよ『サア水を持てお出で』『口を潤してお上げ』サア皆なお出で『お婆樣、水を……………』『お婆樣…………』反應は全く無い。小牧醫士は脈を取つて、白い布をお婆樣の面に被ふて、『今、一呼吸…………』暫らくして聽診器を當て、『アヽ今のが最後の…………』夜は全く寂寞

燈火もゆらぎて落ちぬ梅一輪

八、送。葬。

●一日隔いて廿日午後二時福田家にて納棺式を濟ませ、其より二里餘り遠き染井の里に野邊送り、道は泥濘を溶かして歩行甚だ難けれども、薄曇りし天候は甚だ溫かく靜かであつた。

一夜一日、暴れにし吹雪、跡も消えて
開けき野邊に、君を送りぬ

●囘り見れば、お婆樣は甚だ雪に緣が深い。雪の爲に床に臥し、雪の爲に危篤に陷いり、雪の爲に奪ひ去られた。雪はお婆樣の爲に忘るべからざる仇の樣にも思はれる。けれど深き〱感謝を以て逝き給

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

斷腸の想ひ

在大連　孫　五十嵐憲邦

悲しく御手紙拜見致しました。

私が此地へ來てから、爰に二週年、其間の年月はでくもう短かい間で御座いますが、只の一日として懐鄕之念は去つた事は御座いません。其内でも親愛なる父母兄弟は實に日々の學課よりいとも大切に記臆して居りました。折から今度の御手紙に接しまして層一層にも御慈ある御母上の御教訓は如何程豚兒をして覺醒せしめたで御座いましようか、實に多大にして感涙にむせぶ次第に御座います、眞に斯くもあるものを、思へば思ふ程私が過去の生涯に於ける大それた罪惡を追想して只の一分間も此の腐甲斐なき身を悲しみ恨まずには居られません。

嗚呼御母上、罪のむくひは死と云ふ格言が御座います、私が過去に犯せし罪惡のむくひは覿面で御座いました、實に此格言の如く終日を苦煩の内に只人の慈に生ひ育つて居ります。

此時量らずも御老母御死去の御電報にて實に喫驚の外は御座いません、只夢の如く幻の如く想像せしものゝ、斯く隔つ身程實に慕はしく後はせきあへず哀涙の溢れ落つるのに御座ります。

世の中に私程罪恐しい者は御座いません、亦となき一層之御慈悲をたれさせ給ふ御母上には此の世にもなき御心勞をかけ亦愛なる兄弟には不徳を致し、今は敬慕せる御老母に何の御慰も致さゞりしに、御死去と聞き、眞に斷腸の想ひに堪へず居ります。

爰に御老母御永眠之御書面に接しまして陰乍らいさゝか御哀悼申上ます。終りに臨んで御母上様の御健康を祈り居ります。草々頓首

明治四十二年一月二十一日　憲邦

御母上様御許へ

追伸　いづれ後便にて御音信致します何卒お力落さず御稔斷の程願所居ます。

おばあさんと要君と僕

權田保之助

◎要君と二人して、勉強しやうなぞいふ考を起して要君は角筈なる福田のおばさんの所から、僕は神田にある自分の家から出て、小石川の小日向臺町なるお醫者さまの宅の一と間に寄寓することになつたのはもう半年以上も前、櫻も散つて若葉の匂がある五月半ばのことだつた。要君の引つ越したのは僕よりも一日まへの確か十四日だつたと思ふ、僕は午後からお手傳に出掛けた、大きな重い葛籠が載る、本が載る本箱が載る、靴も釣るされて愈々荷車が曳き出されるばかりになつたので二人は、おばあさんにお暇乞ひに行つた。玄關の次の間の四疊半敷きの細長い部室の隅にある長火鉢に倚り、緣側に面した障子を脊にされておばあさんは、つくねんとして居られた。火鉢の上には大柄な湯呑に飲みさしの苦さうな澁茶が半分ばかりある。要君はいろ〳〵と此れからのことを戒められ、要君よりは年ばかり二歳の兄である僕に、「要のことは宜しく賴みます」と大變なお頼みを受けたのであつた。外へ出ると今し方まで晴れ渡つて居た空は、いつかどんよりと曇つて、乾の方からもく〳〵と大入道の樣な雲が湧いて來る、遠く〳〵底鳴きのする雷のどよめきさへ聞える。……あの時のおばあさんの樣子が今も眼の前にちらつく、聲も聞える樣だ、喉からもぎれて出る樣な咳までが聞える。あれがおばあさんと親しく接した最後に成らうとは知りやう筈が無かつた。

◎酒屋へ三里、豆腐屋へ二里とまでは行かずとも、何處へ行くにも坂ばかりの小石川の高臺のお醫者さまの家の北を向いた六疊の間に、要君と二人して机を併べることとなつた、襖一重の隣の間は診察室、來る人はどれもこれも何處か惡い人ばかり、滿足な人

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は一人も有りやしない、自分はつく〴〵と病人の多いのに就いて、人間は病の器だといふことの意味深いことを悟つたのである。

◎要君は毎朝々々早稲田へ通ふ、僕は入學試驗の準備で毎日々々馬鹿な勉強をする。夏休みが來た、要君は旅行をした、僕は益々忙がしくなつて來る。角筈の福田のおばあさんの所へも長いこと御無沙汰をして仕舞つたので、おばあさんにも會ふ折がなかつた。

◎其の中に秋になる、要君は毎日毎夜、學校へ行く僕の試驗は近付いて來た。時々角筈から手紙が來て要君は『世界婦人』の編輯や校正によく出掛けた。歸つて來ては『おばあさんは樽柿の甘いのが好きだから今日は柿を澤山買つてつて上げた』『おばあさんはお茶が好きだから今日はいゝお茶を持つてつて上げた』などゝ云ふ。おばあさんがどんなに嬉ばれたろうかと僕もうれしい氣がした。

◎小春の日和を樂しむ時も過ぎ、霜月師走と移り更つて世は冬枯れの寂しさとなつた。學校も冬期休業となつて要君はちと纏まつた讀書をし度いものだと云うてゐる時に、角筈からおばあさんが病氣だから直ぐ來る樣にとの手紙が來たので、要君は急いで出掛けた。要君は角筈へ泊つて看病してゐるので歸つて來ない、其の内に僕も年末の手傳ひにと神田の家へ歸つた。すると暮の廿五六日頃に要君が僕を神田の家に訪うて吳れた。おばあさんは氣分が段々とよくなる樣だとのことであつた、僕は『年寄りと云ふものは中々強いものだ、明日をも知れぬとか脆きは人の命とかいふことは却つて若い者のことで、年寄りはもう駄目だ〳〵と云ひながら容易に倒れるものではない、それに年の暮といふものは病人にとつては嫌やなものだけれど、正月になつたといふと正直なもので必ず元氣が付くものだから………』と慰めた。

◎すると暮の卅日に要君は、おばあさんの病氣はもう心配することは無いといふので小日向臺町の方へ歸つた、僕は神田で年を取つて八日に小石川へ歸つたのである。聞くとおばあさんは元氣に成られて、元日にはお餅を四切れも上がられ皆を驚かしたのことで、此の分ならば暖かにでもなれば自然に快癒されると、纔かに愁眉を開いたのである。

◎すると暮には雨一滴も降らなかつたに引き代へて正月になつて切りに雪や雨が降る。『東京の奇寒』は各新聞に二號活字の標題となつて表はれた。東京の町の内にも凍死者が出るといふ騒ぎ。丁度十二日の寒い〳〵晩だ、お醫者さまは往診へ行つた留守に、一人の蒼褪めて瘠せた四十格好の男が竹の杖に縋つてやつて來た、寒さの爲めに喘息が起つて、話をするとさへ出來ぬ位、連に喘ぎ〳〵咳き入りつしてゐる、『どうか注射をして下さい』といふけれど先生は留守で、僕等は藥一つ調合することも出來ない、注射などは思ひも寄らないので、近所の醫者を敎へて返へした。要君は『あゝ何だか厭やな氣がする』と顔を顰めて居た。

◎處が、翌朝、眼を覺ますと、角筈から手紙が來てゐる。おばあさんの容態が面白くないといふことである、要君は早速出掛けた。僕は用があつて神田の家へ歸つた。

◎翌る日、僕はおばあさんの御病氣を御見舞に行かうとして仕度をしてゐる時に、要君から手紙が來た『君、おばあさんの病氣は惡るくなつた、今朝僕が福田を出て學校へ行つたあと大變にわるくなつたのださうだ、病氣は危篤になつた、あと二週間以内の生命だつて。

昨夜の喘息病みの顔が見える………馬鹿な迷だ』

と、讀んで早速角筈へ向つた………福田のおばあさん初め、石川さんも要君もゐる、おばあさんは奥の八疊の間に靜かに眠つてゐられる。

◎丁度拾九日だ、朝、要君から手紙が來てゐる、昨夕方に出したもので

『………おばあさんは愈々惡るい明日、明後日といふ、又雪だ、いやな雪だ、僕は學校を休んでゐる

………』

とある、てりやーいよ〳〵大變と思つてゐる、間も

326
Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なく、又手紙が來た、表には一月十八日夜と記るしてある。

「親愛なる榛田君

只今まで大變に御心配をかけましたわが祖母上は只今、八時、藥石終に効なく逝つてしまひました詳しきお話しは又の事と致します、先は御報知を申し上げます、先日君が見舞に來て下さつた時、これが僕の親友であると紹介したかつたんだけれど、もう駄目です、先生に宜しくお傳へを願ひます。草々」

讀んで驚いて、直ちに僕等の友人の二三にこのとを手紙で知らせて置いて、角筈へ行つた。親戚の方は勿論、木下さんも來てゐられた。用に出て居なかつた要君が燈がつく頃漸ひ歸つて來たので導びかれて臥床の側に寄つて覆布をとると、おばゝさんは眠つた樣に瞑されてゐる。

●編輯局より

△本誌主幹福田英子の實母景山楳子女史は去月十八日福田宅にて永眠致しました、本號は即ち特に故人を偲ばん爲に編輯したのであります△楳子女史の經歷、逸事、作業等に關しては尙ほ記すべき事甚だ多けれども何分にも葬式取込やら看護の疲勞やらにて之に力を盡すと能はず、本號の編輯は甚だ意に叶はないのでありますが、定期のものなれば已む無く不完全のまゝを公にするに至りました△且つ讀者諸君に御詫び申すべきは、本號全體を一個人の事にて充たしたる僣越の罪是れであります、併し楳子女史が唯だ本誌主幹の母たるが故にかく紀念號まで出したる譯では無く、岡山の女子教育には多少の効績もある人なると、且つは此人によりて多少アの時代を知るの手段ともなるべきかと思ひてかくは計らひ申しました。讀者諒之。

327

神保町時代

孫 景山要

最う十年も昔しの事になります、おばゝさんと私しは神田の南神保町に二人きりで家を持ちました、町の向ふ側は一つ橋通町で、沛田の叔父さんがゐました、私共がこんなところに住む樣になつたのも叔父さんの家が近所であつたからです、私し共の家は通りから一寸路次を入つた、とてろに在りました、三軒長家の一番左の端で、二坪程の庭もあり、この三軒の中では一番宜かつたのです、その頃はまだ今の樣に物價が高くなかつたものですから、三圓程で臺所道具を整へる事が出來ました、私しは富士見小學校の高等科一年生でてゝから、麴町の富士見町まで毎日九段坂を上つて、通つたものです、おばゝさんは交代なき飮事掛りで、朝は私しの知らない間に起きて、宜い加減の時になれば私しを起して一所に朝飯を絡り、學校へ出してくれます、その頃私しは十一二でヤンチヤで、何事にも無頓着で自分の留守の間、おばゝさんは何をしてゐらしやるかなどゝいふことは、些もかまはなかつたのです、今から考へると家内の掃除をしたり縫ひ物をしたりして隙があれば何か本などを讀んでゐらしたのです、新聞は讀賣新聞を取つてゐました、おばゝさんは私しのいふ事ならば大抵の事はなんでもかなへてくれましたそのかはり卑怯な事をしたり、慾な事をしたりするといたくしかりました、又時によると腕を打つ事がありますそんな事はめつたにはありませんが、おばゝさんに一寸打たれると非常にいたかつたものです、此の時おばゝさんはすでに七十の坂を幾つか越して居ました、力も精も衰へてゐました、家は陰氣なしめつぽい濕氣の多い長屋住ひです、それでもおばゝさんは氣だけは、確かりしたもんでした、近所

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

への義理も缺いた事はありません、私しを育てるにも決して世の親のすると異なりません、否却つて非常に嚴格でした、その上によく氣が付いて、私しに不自由をさせた事はありません、鐵砲を買ふなんていふ大きな謀反心を起した時でさへもおばあさんは私しの思ふがまゝに発してくれました、たゞ私しが小僧の僻に新聞を讀み、貸本屋から、小説を貸りて來て讀む事だけは決してゆるしてくれませんでしたそれでも内所で讀んでゐましたが、見つかつてあとからは甚しく叱られた事もありません、私しは毎日一錢づゝもらつてそれは、大抵貸本屋へ拂ひ込みました、なるならば最一度この樣な生活を送つて見たい樣な氣も致します、朝　起こされるとすぐに温い飯が春慶塗のお膳に待つてゐます、學校から歸つてくると、お菓子があります、夕方、竹橋の兵營に夕日が沈んで、お豆腐屋の喇叭が遠くに響く、自分等は遊びに疲れて、「蛙が鳴くから歸へろ！」つて云ひながら玄關まで驅つけると内からおばあさんが待ち兼ねた聲で『御飯ぞな、早うお歸り』つて、

その後私し共は神田の北神保町に住まつた事があります、又府下角筈に家を持つた事もあります、詳しい事は今は書けません、思ひ出はつきません、今から考へれば、その樂しかつた、日その無邪氣無頓着なりし日も、却つてあはれな話しを一層にあはれにするばかりです、私しから申せば世界にたつた一人、自分の心をゆるし、自分の全身を捧げてよかつた、人はおばあさん、一人きりでした、おばあさんは私しの父で母でそして弟思ひの姉さんでありました、名だけはおばあさんでありましたけれど私しは孫でありましたけれど

おばあさんの力が愈々なくなつて、精が全くつきて氣も次第に弱くなるにつけ私しを思ふ情は一しほ度を加へました、私しは所謂おばあさん子です、私しがかく大きくなつたのもおばあさんあつたがためです、

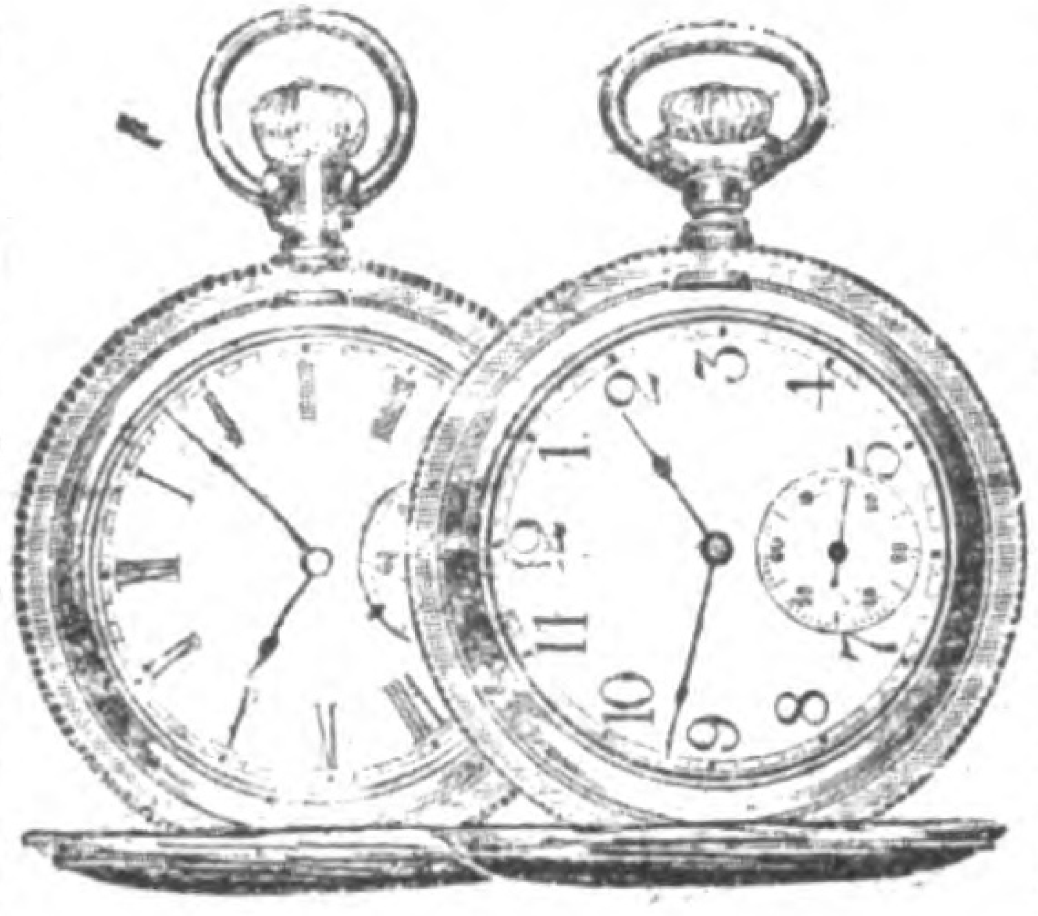
生谷天來君譯補
詩聖 ダンテの教訓
定價七十五錢
小包八錢

ダンテか世界一等の詩人にして古今絶倫のシーたりたるは世既に定評あり本書は即ち此詩聖の一代の生命の教師たる神劇に含れと共傑作たる無限の教訓と暗示とを明白に細叙せるもの若し夫れ人生の感と宇宙の謎と社會の煩と文明の惱に遇ふて苦悶懊闘に堪へざる者は來りて時詩聖の決解を仰げ果して然らば一切の疑問と一切の苦痛は宛ら雪の如く融解して汝は再び若き强き新なる幸福の人たるを得む

發兌　東京市京橋區尾張町二丁目　警醒社書店
（振替貯金口座五五二番）

小兒科
内科
婦人科
毎日　自午前八時　至午後六時
淺草區馬道町三丁目
小牧醫院

天賞堂新輸入
米國製　安全時計發賣
十二サイズ（十七形）銀無地側
器械ニツケレーアンクル爪石入龍頭卷



價拾壹圓半

●同金着側甲種側價拾七圓（彫側價）
●同乙種價拾貳圓半
●同銀側金象眼入價拾八圓半
以上盤面文字羅馬數字亞剌比亞數字共同價ノ事
●市外送料金拾貳錢
東京京橋區尾張町（電話新橋特二三三、特三一五三）振替貯金口座五九六六
時計及寶玉類内外雜貨貴金屬美術品商
天賞堂

齒科治療 自午前八時 至午後十時

吉瀨齒科醫院

院主 吉瀨才市郞

東京市神田須田町二十六番地
(萬世橋内右横町)

●藥價手術料共半額
●貧困者施療

涙紅醫院主院長

醫士 一瀨鷹一

一院 日本橋區蠣殼町二丁目十四番地
二院 神田區連雀町十八番地

學生勞働者薄給者諸氏には藥價手術料共半減又無料

木下尚江君著

言々句々皆熱血の文

再版	五版	三版
墓場 價卅五錢 送六錢	乞食 價卅五錢 送六錢	飢湯 價四十五錢 送六錢

東京本郷弓町一の二
發行所 昭文堂
振替東京七六七四番

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の御肌には殊に効驗著し

定價 大瓶廿五錢 瓶入十二錢
袋入五錢 小袋三錢

本舗 ライオン歯磨發賣元
東京神田柳原川岸
小林富次郎

日本一の婦人雜誌には日本一の大文字あり

婦人世界

二月 一日發行 四卷 第貳號 毎月一日發行 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 半年分增刊共一圓五錢 一年分二圓五錢 郵稅不要

◎夫婦情愛論……村井弦齋
▽最も敬愛さるる婦人……▽感心すべき金滿家の娘
▽日本婦人は覺悟あり……▽夫婦喧嘩の仲裁に入る

◎京都女學生の優美なる風俗
◎千代田大奥の女中生活眞相
◎士族の娘が商家に嫁入りて驚いたこと
◎嘉悅孝子氏の雜巾がけ
◎料理談……弦齋夫人
◎和漢古今文藝談

◎十二人の子供を教育せし私の實驗……松山棟庵
◎舅を感服させたる新渡戶博士夫人の親切……記者
◎斯の如き婦人は妻君檢定試驗に及第す……山脇房子
◎今日の私あるは母と妻と婢のお蔭……三輪田元道
◎雙生兒を產みて養育せし實驗……與謝野晶子

◎婦人の毛髮を美しくす……岡村博士
◎名流婦人十八歲當時の回顧……自筆
◎通俗歷史講談貞女鑑(本號より連載)
◎姙婦と看護婦……榊博士
◎貴婦人の新年會
◎懸賞文藝習字繪畫其他

◎田舍から出て墮落したる婦人の小說的實例……原胤昭
◎盲目の學士に嫁し良人を慰籍せる貞女の鑑……一記者

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 郵便振替貯金口座三二六番 電話新橋八七四番 賣捌全國各地書店